

核兵禁止条約の発効と朝鮮半島の非核化を求めるうねりが広がる！

「原水爆禁止世界大会・広島」に茨城から多数参加！



8月4日（土）、5日（日）、6日（月）、「原水爆禁止2018年世界大会」に参加しました。高等学校教職員組合の組合員として参加して以来、十数年振りの参加でした。

茨城県からの参加は「茨城原水協経由」で43人です。

「参加者の内訳は一般参加者が15人、とびうお学童保育（ひたちなか市）から保護者8人とその子ども（小学生）7人の計15人。茨城県厚生病院労働組合（茨厚労）から13名です。最年長は73歳、最若手は11歳（小学生4人）でした。茨城原水協を経由せずに参加した人と現地の大会会場でお会いしていますので、参加実数はもう少し増えると思われる。今年も現地の会場集合でした。

■多彩な人たちのあいさつや訴えが続いた「世界大会・広島」開会集会

開会総会は午後2時から。小田川義和議長は開会宣言で「核兵器禁止条約と南北朝鮮、米朝首脳会談は朝鮮半島を含む核兵器のない世界への大きなチャンス」と述べ、「安倍政権は世界の大きな流れに向き合っていない」と批判しました。「この逆流を押し返す力は市民社会の共同のたたかいが重要」「被爆者国際署名」「安倍改憲NO！3000万署名」の取り組みの強化を訴えました。

その後、富田宏治国際会議起草委員長が主催者報告、総がかり行動実行委員長の福山真劫共同代表が連帯の挨拶、日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）の藤森俊希事務局次長、広島市の松井一実市長の挨拶（朗読）もありました。また広島の被爆7団体の代表、「辺野古新基地をつくらせないオール沖縄会議」の山本事務局長が連帯の支援を訴え、会場から連帯の大きな拍手を受けました。

アイルランド政府代表のジェミー・ウォルシュ氏は「核兵器禁止条約は核兵器全面廃絶に有効な法的枠組みを定めた画期的な文書だ」と訴えました。



分科会・動く分科会・フォーラムなど、18もの多彩な企画

8月5日（日）は分科会です。フォーラム（1）、特別集会（2）、分科会（8）、動く分科会（5）、交流企画（1）、高校生参加企画（1）など、各人が希望の分科会に参加しました。

午前中は平和公園内の視察と原爆資料館（本館はリニューアル中）の見学や、翌日に開催される平和式典の会場準備などを視察しました。

午後は「核兵器禁止・廃絶へ、政府とNGOの対話」と題したフォーラムに参加しました。パネリストにオーストリア欧州統合外務省軍縮軍備管理不拡散局長のトーマス・ハイノッチさん、アイルランド外務貿易省軍縮不拡散局副局長のジェイミー・ウォルシュさんたち2人の政府代表とアメリカフレンズ奉仕委員会理事・軍備管理協会スタッフのアリシア・サンダース・ザクレさん、原水爆禁止日本協議会（原水協）代表理事の高草博さんの4人をパネリストに迎え、海外代表を含む150人が交流しました。

参加者5000人が「国際会議宣言」を採択！

最後に、「核兵器のない世界を求める多様で壮大な行動」を提起した「国際会議宣言」を採択して閉会となりました。参加者は5000名と発表されました。集会終了後、広島駅構内の店に集合し、広島焼きなどの現地ならではの料理を楽しみながら、多彩な「茨城交流会」を開催しました。



60人余が参加した日本平和委員会交流会

「フォーラム」終了後、近くの「鶴学園広島校舎」で開催される日本平和委員会交流会に参加しました。平和行進の通し行進者として活躍され会員のうち南（京都）、西田（滋賀）、栖原（神奈川）の3人の方から感想などの話を聞きました。

世界大会に参加した韓国代表のイ・ジュンキさんが「ろうそく革命」の背景や韓国政府と北朝鮮の現状や国民の声などを報告、辺野古基地建設反対のたたかいを進める「オール沖縄」事務局長の山本隆司さんによる現地からの報告を受けました。さらに各地の取り組みを交流しました。

核兵器禁止条約に一言も触れない安倍首相の挨拶

最終日の8月6日（月）は「平和式典」の参加です。85ヶ国と欧州連合の代表が参加しました。私たちの宿舎は東広島。新幹線で一駅の距離です。始発の臨時新幹線の6時43分に乗って式典会場に駆け込みました。5万人もの参加者で式典会場は満席で入ることが出来ません。仕方なく式場の近くで立って参加となりました。暑さは半端ではなく、会場担当が用意してくれた冷えたおしぼりがすごく嬉しかった。8時15分の黙祷は会場ばかりでなく市内各地で行われました。

ヒロシマデー集会（閉会総会）に6000人参加

午後から県立総合体育館で開催されたヒロシマデー集会（閉会総会）は、オーストリアのトーマス・ハイノッチさんが挨拶。核兵器禁止条約の実現は「私たち全員取り組みにかかっている」と述べました。被団協の代表等が決意を述べ、訴えました。アメリカやベトナム、韓国、英国の市民代表も自国政府に核兵器禁止条約の批准を求め、国際連帯で条約の発効をめざす決意を表明しました。

日本共産党が挨拶し、自由党の小沢代表、「沖縄の風」の糸数慶子代表、「無所属の会」の岡田克也氏のメッセージが紹介されました。

久しぶりの参加で、原水爆禁止に向けた世界の動きを目の当たり、大きな勉強になりました。また広島の人たちも「原水爆の被害は二度と起こすまい」との思いを、慰霊と言う形で新たにしている様子を実感することができました。



茨城歴教協土浦支部例会で「3.11東日本大震災時の東海第2原発の 危機的状況と廃炉への道」を報告

高橋裕文さんの報告

7月21日、牛久市で行われた茨城県歴史教育者協議会土浦支部で高橋裕文氏が次のような報告を行いました。

2011年3月11日の東日本大震災の時、東海第2原発にも津波が押し寄せてきたが防潮堤があったため、辛うじて被害は非常用発電機1基が水没しただけで「異常なし」だったと言われてきました。当日午後2時48分に東海第2原発は児童停止。環境への影響などはなかった。午後4時20分日本原子力機構など全18事業所で異常なしを確認したという（いはらき、2011・3・12）。また、16日県対策本部は「東海第2原発は停止中で、爆発など全くのうそ。風向きによって飛散した放射能が流れてきているだけで、数値も変動する。健康に影響はないレベル」と危険性はないと訴えていました（いはらき、2011・3・16）。しかし、日本原電作成の3月11日から15日の原子炉内の温度・圧力のグラフをみれば、3月11日の大地震と津波襲来により原子炉内は水蒸気が300度となって圧力が高まり危機的状況に陥り、職員も「こわかった」というほどになりました。（職員が敷地外に避難したのを地域住民が目撃）。その後、辛うじてこった2基の発電機でポンプを動かして冷却していましたが、なかなか温度が下がらず冷温停止状態（99.8度）になったのは3日半後の15日でした。14日には福島原発が水素爆発しましたが、それ以前に東海第2原発でも危機が迫っていたわけです。

とすれば、福島原発で緊急に行われたと同じようなベントがなされたと思われませんが、6月に至っても日本原電はそれを明確に否定していません。ところが9月になって日本原電は「外部電源を2日間喪失し、原子炉格納容器を守るため内部の蒸気を放出するベント（放射性物質は微量）は不可避だった」（いはらき新聞、2011・9・11）と過酷事故一歩手前でベントしたことを認めました。（120～170回といわれます）。15日に東海村の放射線量は5マイクロシーベルトを超えましたが（いはらき、2011・3・16）、この時原子炉は冷温停止状態になっていたのは福島原発から流れてきたものと考えられます。しかし、冷却水が廻っているにもかかわらず発熱したその原因は何であったのか明らかではありません。燃料棒を支えているステンレス製のシュラウドサポートに40カ所の亀裂があることは以前から分っていましたが、大震災により原子炉内の燃料棒（長さ4m）の破損はなかったのか、なぜ定期点検といたしながらその後7年間も稼働しなかったのかも疑問が残ります。こうした危機的状況を「異常なし」ですませ、破損部分を交換し規制委員会に廃炉期限間際になって20年延長の申請をすることなどあり得ないはずで、やはり廃炉するありません。

うしく平和の会・日中友好協会茨城県南支部 主催 パネル展示&講演会

「戦争と平和を考える」 ～うしく平和の会～

平頂山事件（坂本博之氏）、戦争と沖縄（太田昭臣氏）、原爆写真展

今年は終戦後73年を迎えます。当時を体験した人が少なくなり、戦争と平和について語る機会が少なくなった今、あの戦争はどうして起こったのか、そして戦争の傷跡は今なおどのように残っているのかを、改めて問う事が必要であると感じます。今回のパネル展示講演会では、「加害」と「被害」という両方の側面から戦争を見つめました。

1931年の満州事変（柳条湖事件）に端を発する中国東北部での日本軍の動きと、1937年の南京事件を、パネル「南京事件・15年戦争について」で展示しました。

また同じく中国東北部に位置する撫順（現在の遼寧省撫順市）近郊の平頂山集落では、柳条湖事件の1年余りの後の1932年9月に、日本軍による住民大量虐殺事件が起こりました。

この平頂山事件について、幸存者（生き残った人）による訴訟が行われてきました。その弁護団の坂本弁護士のお話とパネル展示から、平頂山事件の実態について考えました。さらにパネルでは、原爆写真展も開催し、当時の被害の状況を見つめます。そして、戦後 アメリカ軍に占領された沖縄では、米軍基地の問題がいまだに解決されていません。

平和かわら版 No.816合併号 別刷り版（2/2ページ）

2018「原爆と人間展」に1,355人

ピースデー（8/11）に120人

～土浦平和の会～



「2018原爆と人間展」と「ピースデー」の全プログラムが成功裏に終了しました。

写真展には6日間で1,355人が来場、小さな子供連れのお母さん、じーっと見入る老人。被爆者署名などに応じ、折り鶴に協力してくれる人も。

「広島で学んだこと生かしたい」



土浦市中学生平和使節団報告に感動！

メインイベントの「ピースデー」（8/11）には延べ120人が参加。土浦市が毎年市内の全中学校から選ばれた使節団を広島に派遣しています。中学生平和使節団のうち9名が参加し、被爆地広島を視察した前後の心の変化、平和への熱い思い、将来への希望を述べました。「広島で学んだこと生かしたい」という報告は感動的でした。

なかでも土浦市平和使節団大西陽子さんの朗読「あきらめるな（核兵器の終わりの始まりに）」はノーベル平和賞を受賞した国際NGOのICAN、サーロ節子さんの講演の一部を含む胸に迫る内容でした。

午前中はドキュメンタリー映画「封印された原爆報告書」、午後はアニメ映画「この世界の片隅に」が上映されました。また、茂木貞夫氏（茨城県被爆者協議会副会長）が広島の被爆者としての生々しい体験を語りました。

来場の男性から寄せられた2千羽以上の折り鶴もありました。これは毎日こつこつ折り続け、この日に会場に届けてくれたものです。



この戦争とオキナワの問題について、ビデオ上映と元琉球大学教授大田先生のお話とともに考えることができました。

（牛久平和の会 会報から）